

「上山城」からのたより 春・第167号

「刀」から「軍刀」へある「刀」の物語

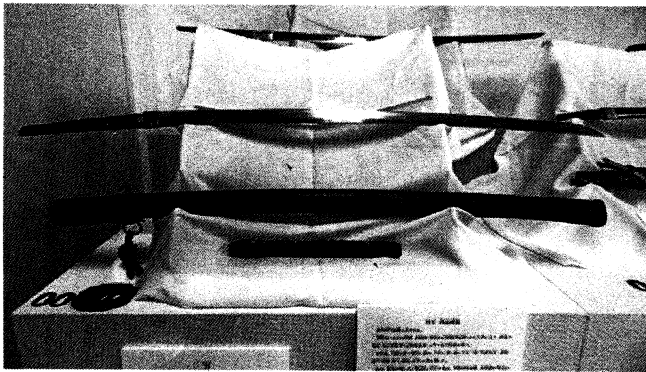
(公財) 上山城郷土資料館学芸員 長南伸治

もう間もなく終了となりますが、今月四日まで上山城では企画展「五月人形と刀剣・甲冑展」を開催しています。今回はその企画展で展示している一振りの刀にまつわる物語をご紹介します。

その刀とは、上市市内の個人宅で保管

されていた(現在は上市市に寄贈)、「浪華住月山貞吉造之」の銘が刻まれた、長さ二尺余り(六六・五cm)の刀です。

「銘」に刻まれている「月山貞吉」とは、江戸時代後期に活躍した刀匠で、出羽国(現在の山形県河北町)から江戸に出て、同地で名匠水心子正秀(出羽国出身)から作刀技術を学び、その



月山貞吉が作った刀 (個人寄贈)

後、大坂に移住し、六代に渡り続く刀工一派、大坂月山の元を築いた人物です。

この刀の他に、近年、貞吉(と息子の貞一)が上山藩士山村求馬(戊辰戦争時の上山藩総督。同戦争で戦死)のために作成した短刀が新たに発見されました(二〇二

三年四月十九日付「山形新聞」参照)。このことから、上山と名匠月山貞吉との関係は意外に深いものであったことを知ることができます。

さて、話を企画展の展示品の刀に戻します。この刀を納める鞘は周囲に革が張り巡らされた、江戸時代の雰囲気にならない造りとなっています。なぜ、このような造りになっ

るのかというと、それは第二次世界大戦中に日本軍兵士が帯びる軍刀として仕立て直されたためとなります。武士のために作った刀が、時を経て日本軍兵士の軍刀として用いられる。自身が作った刀が、

その後、こんな物語を辿るとは、さすがの名匠月山貞吉も驚いていることでしょう。刀というと見た目の美しさに気を取られがちですが、この世に存在する刀の一振り一振りに、今回ご紹介したような歴史が存在しています。その歴史についても目を向けることで、より奥深い刀の世界(沼)にハマることができると思いますが、ぜひ試してみてください!

「お知らせ」

月山貞吉の刀を含む、上山城収蔵の刀剣の手入れを体験できるイベントを、今月十日に開催します(定員五名・事前予約制(先着順・申込先上山城 ☎〇二三一六七三―三三六六〇)。見学は予約不要です。

「常設展示室から」抽選で景品が当たる「クイズ上山城探検」

を毎月実施中。クイズを解きつつ、ご見学をお楽しみください。